

【親鸞部門(高校)・最優秀賞】

たった一言

私立東京農業大学第二高等学校 第1学年 山下真葵

必ず乗車しなければならない電車に乗れなかった日のことだ。次の電車では学校に着きたい時間に間に合わなかった。母は朝という一分一秒のロスが後にひびく忙しい時間なのにも関わらず、往復一時間半以上かかる学校まで車で送迎してくれた。

車では朝の私の行動について少し怒られた。電車に乗り遅れたあせりと母の指適が凶星でイライラしてしまった。その後は何も話さず、流していた音楽が聞こえるだけだった。

学校に着いたとき、あせりとイライラであるたった一言を言わなかった。普段母に様々なことをやってもらった際に必ず言っていた一言だ。いつも以上に母の時間を奪ったのに言わなかったのだ、「ありがとう。」のたった一言を。車のドアを閉め、顔を上げたときに目に映ったのは悲しそうな顔でため息を吐く母の姿だった。

私は一日中、朝見た母の姿が忘れられなかった。授業を受けているときも、休み時間に友達と話しているときも、部活のときも。特にお昼に母が作ってくれたお弁当を見たときに泣いてしまいそうだった。「ありがとう。」のたった一言を言わなかったことをすごく後悔した。

帰りにも駅から家まで送迎してくれた。母はもう気にしていないように見えたが、母の姿を見たとき、私は後悔の念に駆られました。朝と同様会話はなかった。家に着いたとき、後めたさはあったが勇気をふり絞り、「朝も今もありがとう。」と伝えた。少し早口で声が小さくなってしまった。でも母には聞こえたようで、「おかえりなさい。」とうれしそうに穏やかな笑顔で言った。

私が未来に伝えたいこと。それはたった一言の感謝をしっかりと伝えることだ。どれだけ自分を取り巻く環境が進化し、変化していっても自分の口で自分の気持ちを伝えることを忘れてはいけない。私はそれを未来に伝えていきたい。